

少子化と高校魅力化という謎な関係から 地域学校協働の時代の高校教育を考える

Mysterious Chain between Declining Population and Enhancing the Attractiveness of High School: A Study on the Collaboration between School and Regional Players

樋田 大二郎
(Daijiro HIDA)

「えかき歌」が歌に合わせて描くだけで素晴らしい絵が描けるのと同じように、かつての高校教育改革は産業主義や学歴主義、文科省が提唱する改革に合わせることでそこそこ満足がいく未来を描くことができた。しかし再帰的近代化が進んだとき、「えかき歌」型の教育改革は過去のものとなった。伝統社会が弱体化し、地域が生き残りのために特色を求められるようになり、高校の場合、統廃合は高校の工夫次第で避けることが可能になった今日では、高校改革は個々の高校に対して再帰的な問い直しを求める段階に至っている（樋田有一郎 2021a）。

高校魅力化が大きな潮流になりつつある。この潮流はメディアや文科省によってますます勢いづけられている。しかしこの潮流は十分に吟味すべきであり、安易に流れに身を任せてはならない。そもそも、高校魅力化の原点は高校再編（統廃合）の流れや学力向上・部活動強化の流れからいったん距離を置いた高校が、自分たちのやってきたことや在り方を問い直したところからスタートした。これから高校魅力化の潮流に身を置こうとしている高校や研究者も、まずは十分に自分たちの在り方を問い、原点となった高校と自分たちの違いにも留意し、この新しい潮流に身を置くことの意義や課題を考えることが肝要ではないか。

われわれ地域人材育成研究会の研究をふりかえると、鳥根県で始まった黎明期の高校魅力化の教育内容の分析は樋田・樋田（2018）で行われた。また、高校魅力化が鳥根県で開始されてから全国に拡大し2022年に始まる高校普通科改革に影響を与えるまでの制度的展開と、高校魅力化の「再帰的な教育改革モデル」としての分析は樋田有一郎（2021a）で行われた。

これらに対して本稿では、①地方の高校が生徒数減少に対して「存続事業」という解ではなく「高校魅力化」という解を選ぶことの意義と課題について、あるいは高校生の学習意欲の低下に悩む高校が「学力向上事業」という解ではなく「高校魅力化」という解を選ぶことの意義と課題について検討することが問いとなる。②そして、高校魅力化の取り組みは生徒のコンサマトリーな（内発的な）欲求充足とインスツルメンタルな（外発的な）欲求充足が一致していること、高校の戦略がレッド・オーシャン戦略からブルー・オーシャン戦略に転換したこと、個々の高校（と地域）が改革の主導権を獲得したこと（テイクコントロール）を検討する。③本稿の用いる資料は訪問インタ

ビューでの語り、収集資料、文科省や島根県の答申等を用いる。④最後に、考察の視点は、産業と社会の動向や生徒の自己実現欲求の動向、教育の地域主義的回転等の視点をを用いる。

本校が検討した地域学校協働型魅力化高校の意義と課題は“テイクコントロール”をめぐる13の側面と16の要素であった。前もって本稿の議論を整理しよう。

- 1) 生徒数の増減に対しては高校の増設や統廃合よりも定員の増減や定員割れへの猶予（すぐには統廃合しない）で対応されてきた。
- 2) 生徒数減少の初期には小規模校は望ましくない教育環境と説明された。
- 3) 生徒数減少期を迎えて、小規模だからこそ魅力があると説明されるようになった。
- 4) 高校の考える将来役立つ勉強と生徒が高校時代に大切にしたいこと（魅力）にズレがある。生徒は①ときめき、ドキドキ、きらめき、②生まれ育った町を好きでいたい、③自分らしくいたい。自分の未来を自分で決めたい、④人と繋がっていたい、と望んでいる。
- 5) 社会変化が高校教育の魅力化を求めている。社会変化には⑤生産消費（あるいは価値共創）、⑥再帰的近代、⑦自己実現欲求が含まれる。
- 6) 高校魅力化は、前述の①から④に応えることで生徒に魅力をアピールし、⑤から⑦に応えることで社会からの要請に適合した。
- 7) 高校魅力化はレッド・オーシャン戦略からブルー・オーシャン戦略への転換であった。
- 8) 高校のレッド・オーシャン戦略は進路指導の強化、部活動の強化、そして存続事業の強化であった。
- 9) 高校のブルー・オーシャン戦略は、存続事業から高校魅力化事業への転換—地域学校協働型魅力化高校になることであった。
- 10) ブルー・オーシャン戦略を促した要因でありブルー・オーシャン戦略を支える要素は、⑧地域活性化のエンジンとしての高校という位置づけ、⑨中教審答申にある教育の潮流、⑩授業の常識やあきらめの変化、⑪地域の高変革型集団化、⑫“コンサルメンタルな欲望”の出現（外発的欲求充足と内発的欲求充足との調和）、⑬学習観の変化（動機付け、コンサルメンタルな学びの3要素）などである。
- 11) 地域学校協働型魅力化高校の取り組みは⑭地域活性化、⑮地域人材育成、⑯地域協働型魅力化の教育開発、の3要素が含まれていた。
- 12) 生徒が取り組んでいるプロジェクトは調査・探究型、開発・販売型、観光型、地域貢献・提案型のプロジェクトに分類できた。
- 13) 地域協働の効果とそこに高校が参入する地域学校協働の効果が認識され始めており、総務省や総務省は地域学校協働を積極的に後押ししようとしている。

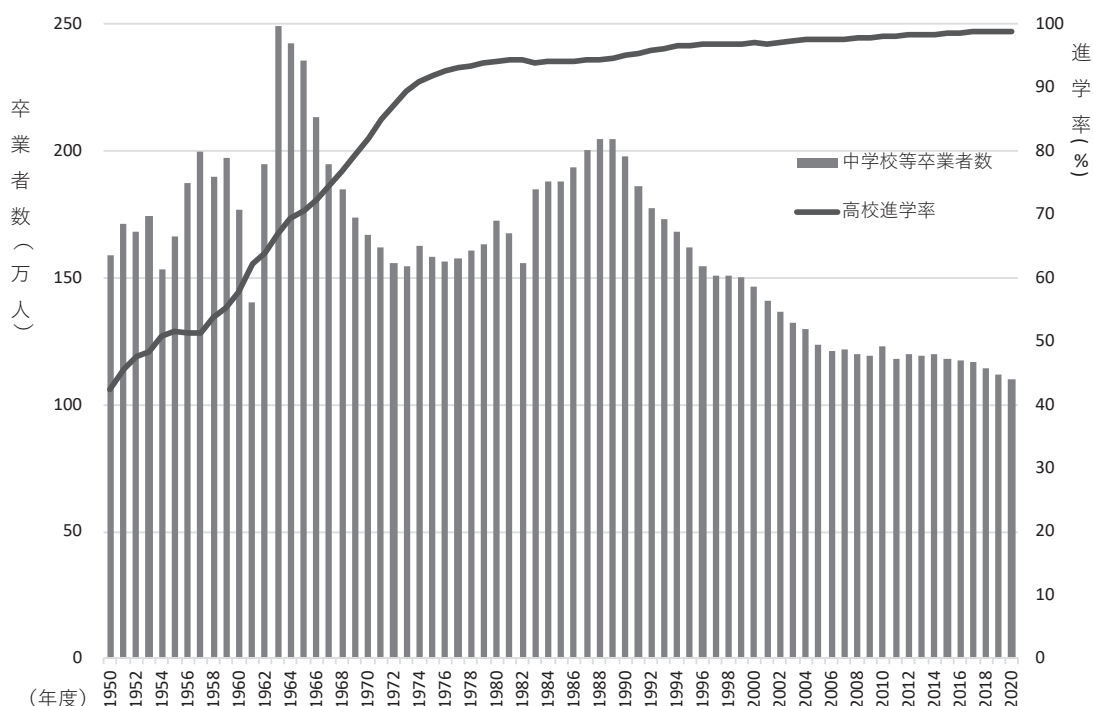


図1. 中学校等卒業者数と高校進学率の推移

※中学校等とは中学校、義務教育学校、中等教育学校前期課程である。

出典：樋田有一郎（2021a: 7）が作成した表をもとに樋田作成

第1章 小規模校の功罪の語られ方の変化

（1）生徒数の増減はクラス数とクラス定員そして定員割れへの猶予で調整されてきた

まずは人口動態的なデータを見てみよう。図1は、中学校等卒業者数と高校進学率の推移を示したものである。中等学校等卒業者数（棒グラフ）は1961年には1,401千人であったのがベビーブームの影響を受けて1962年には1,948千人、1963年には2,491千人、1964年には2,427千人と急激に増えた。これに対して1980年代末にやってきた第2次ベビーブームの影響は、第1次と比べて山はなだらかであった。1986年に1,934千人、1987年に200万人を超えて2,005千人、1988年に2,045千人、1989年に2,049千人、1990年に1,982千人であった。第2次ベビーブーム以降は中学校等卒業者数はなだらかに減少して2019年には1,121千人、2020年には1,097千人と第2次ベビーブームの頃と比べて半分ほどに減少している。

同じ図1で高校進学率（折れ線グラフ）を見ると新制高校発足以降しばらくは急激に増加し、1974年に90.8%になってからは、なだらかに上昇し1990年には95.1%となり、その後もなだらかな上昇を続けて2020年には98.8%となった。このように高校は、すでに準義務教育としての位置付けとなつて久しい。

続いて、高等学校数の推移を見てみよう。高校数の推移については図2と図3の2つの図を見比

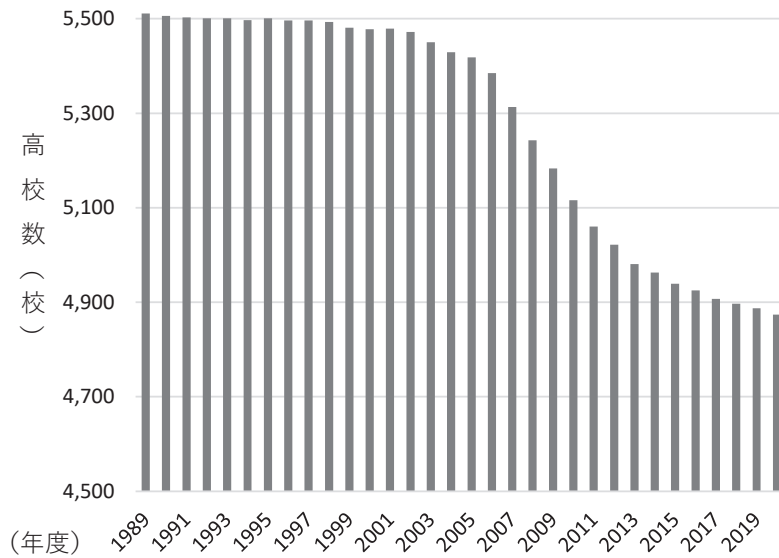


図2. 高等学校数の推移 1: 古い見方

出典：学校基本調査より樋田作成

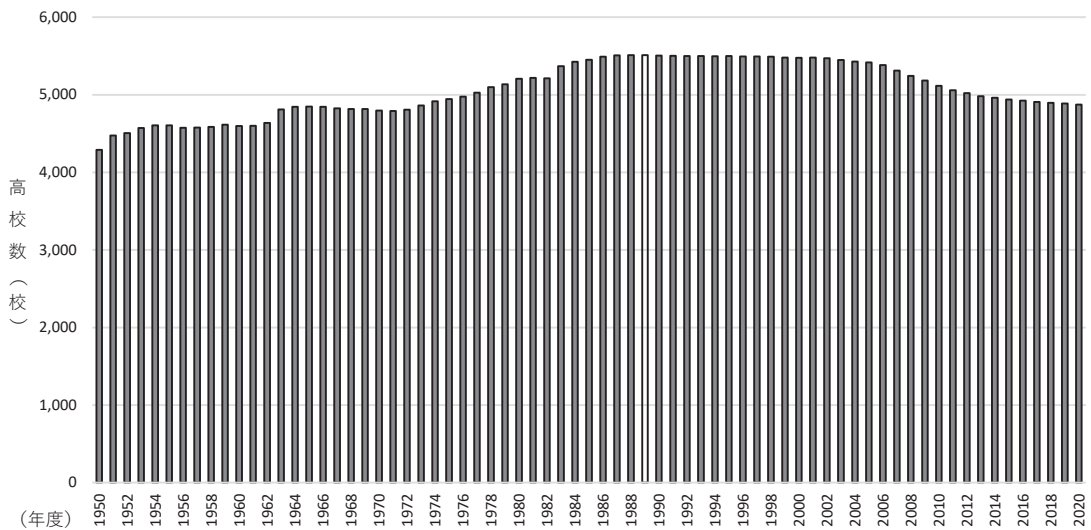


図3. 高等学校数の推移 2: 新しい見方

出典：学校基本調査より樋田作成

べて欲しい。最初に図2は古い見方（高校数減少を問題にするパラダイム）に従って高校数の推移を図示したものである。高校の統廃合の危機を強調するための示し方の工夫がしてある。高校数は1980年代半ば以降5千校台の半ばで推移していたが2004年の5,418校以降は急激に減少して、2020年には4,874校へと16年間で544校“も”減少した（図2では高校数は急激に減少していると印象づ

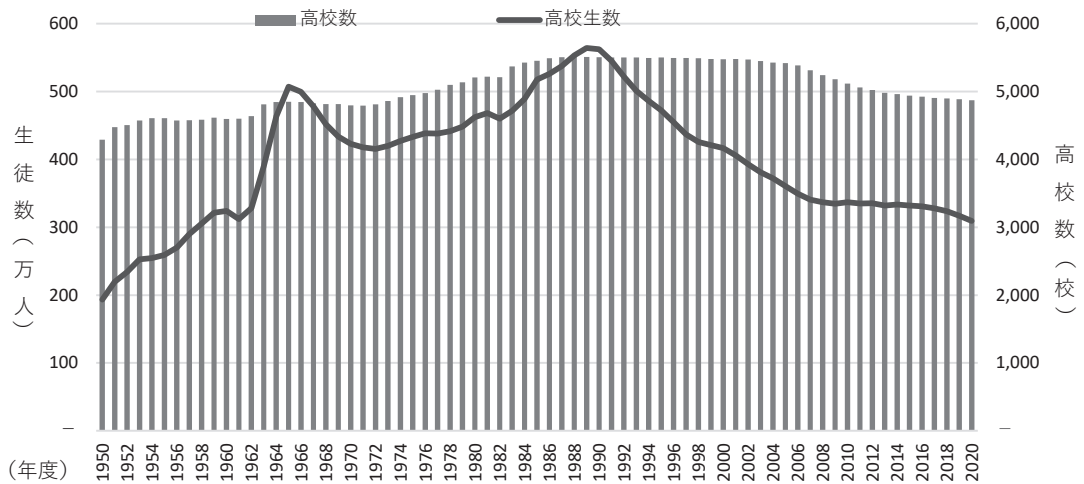


図4. 高校生数と高校数の推移

出典：学校基本調査より樋田作成

けられる)。この図と同じパラダイムに立ってこれまで多くの人が減少が急激であることを強調してきた。

たしかに544校という数字は大きな数字であるが、減少が急激とは認識しないことで別の重要な事実が浮かび上がってくる。図3は図2と同じく高等学校数の推移を見たものである。図3と図2で高校の数は同じである。しかし、図3では推移がなだらかに見える。なだらかに見える理由は、棒グラフの示し方が、図2が1989年よりも以前がカットされ、4,000校よりも下がカットされたレイアウトになっているのに対して図3は1989年以前の年度も示され、4,000校よりも下の部分がカットされていないレイアウトになっているためである。

以上を踏まえて、図4で高校生数と高校数の推移を一緒に示してみよう。なお、図4では高校生数は全学年の生徒数合計である。図4からは次のことが分かる。新制高校発足以降、第1次ベビーブーマーで生徒数がピークを迎えるまで、生徒数は急激に増加する。これと比較すると高校数の増加の割合は緩くなっている。この時期は定員の増加で生徒数の増加を吸収していたのである。その後、第2次ベビーブーマーに向けては1970年代以降は高校増設が行われていることが分かる。そして、第2次ベビーブーマー以降については、生徒数の減少に比べて高校数の減少は緩やかである。東京都や神奈川県、埼玉県、大阪府などでは数十校単位で高校が閉校となったものの地方県ではあまり高校数は減っていないのである（本多ほか 2019）。教育委員会は生徒数の減少に対しては高校の閉校よりも入学定員（クラス数）の削減や「定員割れ」を猶予する（すぐに統廃合しない）ことで対応したのである。

それでは、定員割れの状況はどうなっているのだろうか。読売新聞社が2018年に都道府県立の全

日制高校の定員割れの調査を行ったところ、3177校のうち1311校で定員割れをしていた。

18年春入試で高校の半数以上が定員割れしたのは高知県や鹿児島県、愛媛県、島根県、岩手県など19道県。郡部や工業系、農業系の高校などが目立った。(読売新聞 2018)。

郡部ほど、「定員割れ」の猶予で入学者減に対応しているのである。ただし、特例等を設けて猶予をしているものの、定員割れが続くと分校になったり、閉校となったりする。

(2) ブルー・オーシャン戦略

高校魅力化が始まるまでは、高校の規模が小さいことは好ましくないとする意見が大勢であった。小規模校では、学校の活力維持が困難だという意見である。高校魅力化発祥の地である島根県では2007年3月に島根県立邑智高校と川本高校が統合され島根中央高校となった。その理由は次のように説明されている。

平成11年度から平成18年度までの学科改編等について、全日制では、生徒数の減に伴って、38学級の削減を行った。・・・川本高校と邑智高校があるが、・・・この地域の生徒が、川本高校、邑智高校に進学する割合が年々低下してきており、・・・望ましい教育環境を提供できる求心力のある高校を作っていく必要があるとの判断により、両校を統合することとした。

出展：島根県教育委員会、2006、「第1回魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会
(2006(平成18年)3月20日)会議録(事務局説明)」※下線筆者(以下同じ)

当時の島根県教育委員会は、小規模校は「望ましい教育環境を提供」できないと考えていたことが分かる。しかし、その後の高校魅力化の動向と共に高校教育の状況は大きく変わり、小規模校のメリットが評価されることになる。ここでは、状況の変化を見る前に隠岐島前高校に焦点を当て、高校存続問題から高校魅力化問題への動向(発想の転換)が生まれた様子を見ておきたい。

この取り組みが開始される以前は「高校の存続問題」や「存続事業」と言っていた。しかし、「存続」の危機にあるような学校に、生徒は行きたいと思わず、保護者も子どもを行かせたいとは思わない。

・・・また、「存続」を目的にすると、例えば島前の子どもの囲い込み島外に出させないための施策に向かったり、生徒が減っても廃校にならないための陳情や反対運動などの政治的手段に訴えたり、どこかに無理が生じてきてしまう。この取り組みの理想の姿を考えたところ、中学生が「行きたい」、保護者や教員も「行かせたい」と思う魅力ある学校となり、結果として存続している状態である。

（隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会 2014:11）

このようにして隠岐島前高校は生徒数減少と存続事業を直接関係づけるのではなく、両者の間に高校魅力化事業を介在させたのである。従来の「目的（統廃合回避）」→「手段（存続事業）」というストレートな目的論的關係に対して「手段（魅力化事業）」を投入して、「目的（生徒数増加）」→「手段（魅力化事業）」→「結果（存続）」というパラダイムシフトを行った。この結果、小規模校の景色はレッド・オーシャンからブルー・オーシャンへと変わった。

レッド・オーシャン戦略とブルー・オーシャン戦略という考え方がある。経営戦略論でいうレッド・オーシャンは血で血を洗う戦いを行い生き残りを図る市場である。

これに対してブルー・オーシャンは他者との戦いのない新しい市場や独自の市場である。高校存続でいうならば、レッド・オーシャン戦略は他校との進路実績競争や部活強化競争、住民と政治家を巻き込んだ閉校反対運動、最終的には補助金なども用いて生徒の囲い込みという激しい存続事業を展開することになる。これに対してブルー・オーシャン戦略は他校と競争するのではなく、地域のニーズに合った教育、地域の特色を活かした教育、生徒が目を輝かす教育に力を注ぐのである。競争や子どもの囲い込み、政治家を使った存続事業がレッド・オーシャン戦略だとすると、魅力化はブルー・オーシャン戦略である。

高校魅力化というブルー・オーシャン戦略に舵を切ることによって、前述の2006年の島根県「事務局説明」があったのと同じ島根県で小規模校についての評価は2018年には次のように肯定的なものに変わった。

自然に恵まれた学習環境や少人数による指導などのメリットを生かしていくことができる。
また、地域との連携を生かした教育活動を行い、地域の担い手を育成するなど、地方創生・地域活性化の観点からも重要な役割を果たすことができる・・・学校規模にこだわることなく、地元市町村及び地域の参画を得ながら、協働して学校の魅力化・特色化を図っていくことが望まれる。
（今後の県立高校の在り方検討委員会 2018：14-15）

この文章では、「自然に恵まれた学習環境や少人数による指導などのメリット」、「地域との連携を生かした教育活動を行い、地域の担い手を育成」といったレッド・オーシャンでは振り向かれることがなかった小規模校の特長に目が向けられている。

（3）高校（と地域）による主導権の獲得：テイクコントロール

隠岐島前高校を事例にして、閉校の危機に瀕した小規模校で高校の主導権が獲得されたことを見てもよう。「テイクバックコントロール」は英国のEU離脱賛成派が国民投票のキャンペーンで用いたキャッチフレーズである。邦訳すると主導権を取り戻そうになる。本稿ではバックを取り除き

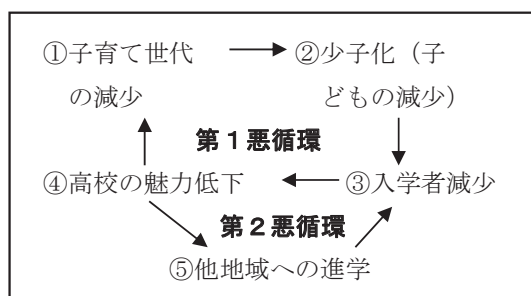


図5. 成り行きの未来の2つの悪循環
出典：樋田作成

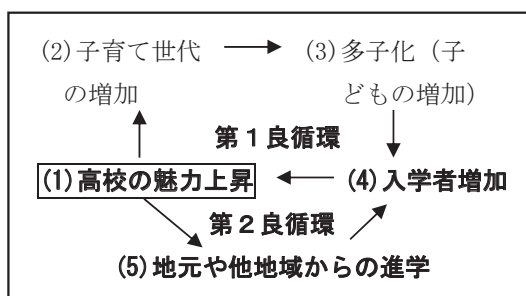


図6. 意志ある未来の2つの良循環
出典：樋田作成

テイクコントロールとする。

隠岐島前高校は「成り行きの未来を回避し、意志ある未来を」というキャッチフレーズを作った。このキャッチフレーズは、成功者の研究で有名なスティーブン・R・コヴィー（Covey 1989＝2015）の主体性についての主張と通じており、高校魅力化の実践者たちに改革の道筋を示したり改革の情熱に火を付けたりする言説である。

コヴィーは米国建国以来の多数の成功者を研究し、自立の習慣の重要性に気づいた。コヴィーの言う自立は人のせいにはしないことを意味している。そして成功の要件として「自分で変えられないこと」ではなく「自分で変えられること」に着目することが肝要であるという。人のせいにはしないためには「今の自分の人生は自分の選択の結果だ」、「人生を自分で選択していくことができる」と考えて、状況と状況への反応の間に自分の選択を介在させることが成功につながる具体的な方法だとされる。

統廃合の危機という状況とそれに対する存続事業という反応は多くの高校で生起することである。そして、しばらくの間の「定員割れ」の猶予の後にその高校が閉校となるというのが残念な現実であった。こうした状況と状況への反応（およびその残念な結果）との間に、主導権を発揮して自らの選択を介在させたのが島根県立隠岐島前高校であった。

隠岐島前高校の「自らの選択」をコヴィーの視点から検討すると、本稿のタイトルにある少子化と高校魅力化という謎な関係の説明が可能となる。

離島・中山間地域の高校をめぐるのは、図5に示す2つの悪循環が起きていた。隠岐島前高校の成り行きの未来であり、コヴィーの状況と状況への反応である。第1の悪循環は①子育て世代の減少が②少子化を招き、②少子化が③入学者減少を招き、③入学者減少が高校の魅力低下を招き、④高校の魅力低下が④子育て世代の減少（地域外への移出、他地域からの定住の減少）を招くという悪循環である。

さらに高校は第2の悪循環に悩まされていた。③入学者の減少が④高校の魅力低下を招き、④高校の魅力低下が⑤他地域への進学を招き、⑤他地域への進学が③入学者減少を招くという悪循環である。

図5の各事象の中で、従来、閉校に瀕した高校が行ったのは③入学者減少への対策、すなわち存続事業であった。しかし、入学者減少はコヴィーのいう「自分で変えられないこと」であった。そして、存続事業に取り組んだ高校の多くが変えられない現実を前にして諦めるしかなかった。

これに対して図6の意志ある未来の2つの良循環では、高校は（1）高校の魅力上昇を企図して魅力化事業を開始した。図6の中で、高校の魅力上昇は高校による「自らの選択」であり、「自分で変えられること」であった。魅力化事業は（1）高校の魅力上昇が（5）地元や他地域からの進学者を呼び込み地元中学卒業者の流出を抑えることに成功した。その結果、（4）入学者が増加し、（4）入学者増加はさらに高校の魅力上昇を招いた。第2良循環が形成されたのである。そして第2良循環の要素である（1）高校の魅力上昇が（2）子育て世代の定住や移入を促進した。そのことが（3）多子化を招き、（4）入学者を増加させるという第1良循環を誘発した。

島根県の高校魅力化原8校（最初に事業をスタートした8校）は、「自分で変えられること」に目を向けることで、良循環化の主導権が自分の手にあったことに気づき、（4）の高校の魅力上昇を行うことで悪循環を断ち切って、良循環を構築したのであった。筆者らの隠岐島前高校の岩本悠コーディネーター（2013年当時）へのインタビューで、観光甲子園で生徒がいつもと異なり大きな声で発表できたこと、グランプリを取ったことが地域から高く評価されたことが語られていた。

入学者数減少に苦しみ高校が閉校回避のために存続事業を行うことは「成り行きの未来の回避」への挑戦であるが、自分で変えられない（変えにくい）ことへの挑戦でありコヴィーの理論に反する。これに対して魅力化に取り組む高校は、魅力化事業は自分で変えられることを行うものであり、「自分の選択」という変数を介在させる営みなのである。「意志ある未来」は自分で変えられることを行うことで実現されるのである。

自分で変えられることは、各高校によって異なっている。たとえば、北海道奥尻高校の事例は、隠岐島前高校を訪問し参考にしつつも隠岐島前高校の事例とは大きく異なっていた。奥尻高校は存続問題の取り組みを生徒数の問題ではなく町の判断の問題にするために道立高校の町立移管を行った。閉校の決定を町が行えるようにし、行政と住民が「自分たちの奥尻高校」の教育を支援することにした。ただし、奥尻高校の「自分の選択」は町立移管だけでなく魅力化事業も同時に行っていた。そして、町立移管は町と町民による魅力化事業支援を促進した（樋田有一郎 2021c）。

長い間、離島・中山間地域の高校は「成り行きの未来」に身を任せてきた。あるいは都市部の高校との進学競争に身を投じてきた。高校運営の主導権を獲得して、存続事業や進学競争というレッド・オーシャン戦略を捨てて魅力化事業というブルー・オーシャン戦略に舵を切った。生徒の学びという意味ではそれだけで十分な成果を上げたのだが、ブルー・オーシャンでの、生徒が目輝かせて行う学びはブルー・オーシャン戦略の理論が予想するように、入学者数を増やし、中退者を減らし、進学実績を向上させている。

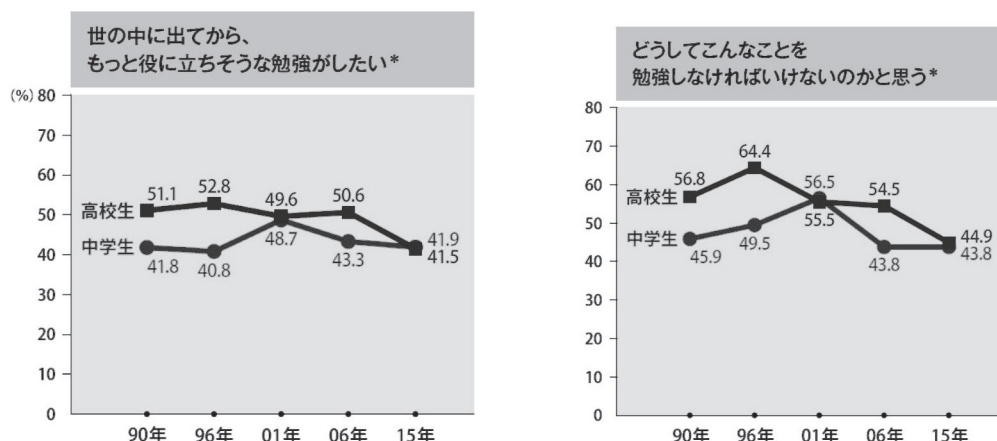


図7. 中・高校生の学習の意識

出典：ベネッセ教育総合研究所，2016，『第5回学習基本調査データブック [2015]』

以上、高校魅力化が始まる前は、小規模であることは望ましくない教育環境であるとされた。その後、生徒数減少期を迎えて定員割れが進む中で小規模校は統廃合の危機を迎えた。隠岐島前高校も統廃合の危機を迎えた高校の1つであったが、存続事業を行うのではなく中学生が「行きたい」、保護者や教員も「行かせたい」と思う魅力ある学校となることを模索した。そのことは主体性を持ちたいという意思表示でもあった。『地域人材育成研究』第4号によると、同じ時期に、北海道奥尻高校も「学校存続の判断を町が決定できるよう決断しました」と述べている（樋田有一郎 2021c: 18）。主体性を持ち自分でコントロールするブルー・オーシャン戦略は、高校魅力化を行う各高校に広がり、今や小規模校は魅力がある高校であると評価されるようになったのである。

第2章 高校の魅力の変化

（1）社会人基礎力、教科の知

魅力化が始まるまでは生徒や保護者に高校を魅力的だと思わせる要素は、進路と部活であった（樋田有一郎 2021c）。これに対して島根県で高校魅力化が始まったとき、魅力化の取り組みの3本柱は進路、部活に加えて地域の特色を生かした教育であった。やがてこれらのうち、地域の特色を生かした教育が魅力として強くアピールされるようになった。

本稿では地域の特色を生かした教育を中心に高校魅力化の取り組みの考察を行うが、その前にまずは高校の魅力を学力の効用の面から検討しておきたい。

学力の効用を巡っては、最近、元大阪市長が有用性と面白さの観点から、「必要十分条件を数学の中で教えるからクソ面白くないし、実際に使えない」と言って、その事例に三角関数を挙げた。元大阪市長の提起は一部の生徒の将来に大きく役立つことや一部の生徒の関心にかなう学習内容を全生徒の必修にすることへの問題提起だと解釈できる。「一部」に該当しない残りの生徒が他の大

切な学習や関心のある学習を後回しにしても、三角関数を学習する必要性については議論の余地があるという当然の主張である。また、「クソ面白くない」という提起はときめきやドキドキ、きりめきを感じられない生徒が少なくないことの問題提起だと解釈できる。

最後に、筆者が参加したベネッセ「第5回学習基本調査」（2015年6月～7月実施）の報告書（ベネッセ教育総合研究所、2016）では、「世の中に出てからもっと役に立ちそうな勉強がしたい」や「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」が、中・高校生ともに4割を超えていた（図7）。様々な取り組みが功を奏して一時よりも改善されているとはいえ、中・高校生は学習の効用感がないまま、あるいは意義が分からないまま学習することを求められている状況である。

（2）主体性・多様性・協調性

中央教育審議会・初等中等教育分科会教育課程企画特別部会は「資料1 教育課程企画特別部会 論点整理」、「2. 新しい学習指導要領等が目指す姿」の中でこれからの時代に求められる人間の在り方を次のように描いている。

他者に対して自分の考え等を根拠とともに明確に説明しながら、対話や議論を通じて多様な相手の考えを理解したり自分の考え方を広げたりし、多様な人々と協働していくことができる人間であること。

社会の中で自ら問いを立て、解決方法を探索して計画を実行し、問題を解決に導き新たな価値を創造していくとともに新たな問題の発見・解決につなげていくことのできる人間であること。
（中央教育審議会・初等中等教育分科会 2015）

学力の3要素である「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協調性」のうち、引用した言説は「主体性・多様性・協調性」が強調された表現になっている。経産省の社会人基礎力に近い学力観である。個々の教科の要素や教養主義的な学力の要素があまり強調されていない。

（3）足りないと考えられていた魅力

進学を敬遠される高校について検討した興味深い資料がある。高校魅力化開始の原8校の1つである島根県立吉賀高等学校が高校魅力化を始める前の資料である。吉賀高校は島根県西部の吉賀町内の唯一の高校であり、1学年1学級の小さな普通科高校である。高校魅力化開始前の段階では、吉賀高校は中学生が吉賀高校を敬遠する理由を次のように考えていた。

- ①理系の進路対応ができる高校へ進学する。（吉賀高校では、理科の教員が生物担当の1名しか確保できず、物理・化学への対応が難しい。）

- ②吉賀高校にはない部活動を求めて他校へ進学する。(野球、バスケットボールなどの体育系部活動や、吹奏楽などをするために他の学校へ進学する)
- ③近隣の他の普通科高校へ進学する。(進学に関してより実績のある大きな高校へという意識は根強く残っている。)
- ④推薦により経済的な得点を得て、私立高校へ進学する。
- ⑤普通科以外の高校へ進学する。

(吉賀高校 2010)

このように、魅力化の取り組み以前の吉賀高校は、地元中学の卒業生が吉賀高校に進学しない理由として、高卒後の進路の幅広さ、進学実績、部活、経済的な問題、専門学科への進学希望などで劣っていると認識していた。しかし、高校魅力化の指定校となり高校魅力化に取り組み始めると認識が変わった。魅力化に取り組む中で、小規模校の良さが意識されるようになったのである。当時の校長は以下のように語っている。

進学校は、・・・、結局、進学実績を求められているところがあるので、模擬試験の成績を気にします。また、クラス間で進度をそろえて授業をしますので、「この子まだわかつたらんのではないかな」と思いながらも、先へ進まなきゃいけません。

ここでは、そういった世界とは全然違って、「この子のためにどうしたらええか」に集中することができます。また、人数が少ないですので、たったこれだけしかいない子供を、「わかってないけどこの子はええわ」とか、そんなことはあり得ないですね。・・・吉賀高校で魅力化に取り組む中で、もう一回考え直すことが多かったです。(樋田有一郎 2021b: 25)

高校魅力化では生徒を地域学校協働という文脈の中で捉え直していく中で、進学校とは異なる教育の観点が強調されたのである。

(4) 高校生の考える魅力

高校生が魅力として求めることは、従来型の高校教育が提供できる魅力とは乖離し始めている。高校生が求めるのは①ときめき、ドキドキ、きらめき、②地元の町を好きでいたい、③自分らしくいたい。自分の未来を自分で決めたい、④人と繋がっていたい等であった。もはやこれらのことは学園ドラマや若者向け小説のテーマとして当たり前のこととなっているが高校魅力化に取り組んでいない高校では進路形成が優先されるあまり、これらの魅力はまだ当たり前になっていないのではないか。

以下、筆者らの調査から、上述の4つの魅力について簡単に説明をする。

- ①受験勉強は砂を噛むようなと表現されることがしばしばあったが、ときめき、ドキドキ、きら

めきはその反対の感覚である。これらの内発的な感覚を人前で表現することは、かつては子どもには許されても大人には躊躇された。しかし今は、社会全体で余暇でも勉強でも仕事でもこれらの感覚の表出は肯定的に受け止められている。

②ある高校教員が筆者に対して、自分は大学進学で町を出るまでずっと田舎に生まれ育ったことを不幸せに感じていたと語った。田舎に生まれたことを恨んでいたという。しかし、目の前の高校生たちは自分の町を好きだと言っている。そのことが羨ましいと語っていた。哲学者の市川浩（1993）は職人の道具は職人の身体の一部になると述べている。これと同じで、家族に愛されて育った、そして遊んだり駆け回ったりした故郷は、生徒の感性の中に埋め込まれており、故郷を嫌ったりさげすんだりすることは自分の一部を否定することになるのではないか。

③後述するマズローの欲求段階の5段階目は自己実現欲求であり、この段階に至っている生徒は自分らしくいたいとか自分の未来を自分で決めたいと欲求する。これは今日のキャリア教育が目指しているところでもある。

④人と繋がっていたいとは、排除より受容を欲する気持ち、競争より切磋琢磨（一緒に成長する）を欲する気持ち、分析より共感する（相手の枠組みで考え感じる）ことを欲する気持ち、共同より協働（同じになる・同じことをするより個性や目的を残したまま協力）することを欲する気持ちである。

高校魅力化の高校の入学者全国募集を支援する2021年版のガイドブック（地域・教育魅力化プラットフォーム 2021）には上述の魅力と関わる記事が紹介されている。そこでは「色々な大人と出会い、関わることで『自分の言葉で喋れる』ように。」「人と違っていいと思う。僕は、自分らしい道を選びたい。」という卒業生の声が掲載されている。さらに「なぜ今、『地域みらい留学』なのか?」というページには、「本物の自然や文化にふれる」、「新たな友達、世代を超えた仲間との出会いがある」、「ここでしかできない挑戦がある」、「少人数教育で全員が主役」、「地域が見守る安心な環境で自律した生活ができる」などの魅力が紹介されている。

表1. 産業変動と個人の欲求の変化と教育の変動

時代区分	生産と消費 (産業変動)	マズローの欲求段階 (個人の欲求)	教育の変動
A. 画一の段階	○少品種大量生産 ◇機能の消費	生理の欲求 安全欲求 集団帰属欲求	<u>教科書を効率的に教える</u>
B. 多様化の段階	○多品種少量生産 ◇感性の消費 ◇物語の消費 ◇地位表示機能の消費	承認欲求 (尊重欲求)	<u>個性重視と多様性重視</u>
C. 能動的多様化の段階： 参加・表現	○◇再帰的 ** 生産消費 *	自己実現欲求 *** (自己表現欲求)	<u>特色化と魅力化 ****</u>

出典) 樋田作成

第3章 社会変化と学校教育の変化

生徒は表1にあるような個人の欲求段階の変化や社会変動の影響を受けている。最初に第3章を概観しておく、生徒はマズローの自己実現欲求に動機づけられ、自己実現に役立つ教育やいまここで (here and now) ドキドキする教育を求めている。つづいて生徒は「定常型社会」(広井2001) という量的拡大がとまり質的改革の続く不安定な社会に生まれ育っている。他の言い方をすると社会学が議論する再帰的近代の中で生まれ育っている。このため、生徒は生涯を通して自分自身と社会を問い直し続けなければならない。最後に、自己実現欲求に動機づけられ再帰的近代に生きている生徒は受動的に学習環境に身を置いたりせず、能動的に学習環境に働きかける。その意味では生徒は学校教育の消費者でもあるし生産者でもある (生産消費)。

受験競争というレッド・オーシャンから距離を置きブルー・オーシャンを求めた魅力化の高校は、それまで受験競争に熱中して気づかなかったこれらの産業と社会の動向や生徒の欲求の変動に向かい合うことになった。このあと、表1にある産業と消費および高校生の欲求の変動と高校教育の変動の関連を検討する。

最初に表1で大まかに時代区分を見ると、A. 画一の段階は日本ではおおむね高度経済成長期までが該当する。少品種大量生産の時代であり、人々は電気でご飯が炊ける炊飯器や歩きながら音楽が聴けるウォークマンなど、機能性の観点から商品を一齐に購入した。生徒は問いと解法を与えられて唯一解を出すというタイプの学びを行ったが、これは職業生活でも会社から目的と手段が与えられ勤勉に画一の商品を生産することが求められたのとパラレルである。B. 多様化の段階は高度経済成長の終わり頃から出現しバブル期まで続いた。多品種少量生産が広がり、消費者は感性や物語、地位表示機能を消費した。C. 能動的多様化の段階では、人々は再帰的に問い直しを行い、開発過程と生産過程に参加して後述する生産消費をするようになった。また、能動的多様化の段階になると、人々はマズローの自己実現欲求の段階に到達した。

教育は、「画一の段階」はもっぱら教科書を効率的に教えることが課題であった。「多様化の段階」は関心・意欲、個性重視と多様性重視の時代であった。この段階では答えは唯一解であっても、解に至る方法は多様であるとされた。しかし、センター試験などでは複数解の存在までは前提とされなかった。「能動的多様化の段階：参加・表現」の時代は特色化と魅力化を行うに至った。教育の特色化と魅力化については後述する。

(1) 生産消費 (prosume)

生産消費 (prosume) は未来学者アルビン・トフラー (Toffler 1980=1980) が『第三の波』で論じた概念であり、生産 (produce) と消費 (consume) の合成語である。1万年前の農業革命が第一の波、18世紀半ばから英国で始まった産業革命が第二の波、そして今日の科学技術の進歩、情報科学の進歩が第三の波である。本稿の文脈で大事なのは、第二の波の時代には消費者が思考や感性の主体性・創造性を生かすための消費行動が、商品の選択であったが、第三の波の時代にはそれが

開発と生産の過程に参加することへと変化したことである。

自給自足と生産消費の相違については、第一の波（農業革命）の後の自給自足の時代には、生産者が消費者であった。この時代は自分が生産した生産物を自分で消費した。これに対して第三の波の後の生産消費の時代には、再び生産者が消費者となった。しかしその意味は消費者が開発と生産に関与したり、または一手間加えて消費することである。消費者モニターやクルマを購入する時のオプション選択やクラウドファンディング、CSA（Community Supported Agriculture = 地域支援農業）などは消費者が生産に関与する事例である。経営学の観点からは、同じことを価値共創（Co-Creation）として論じている。

（2）再帰的（reflexive）

社会学者のギデンズ（英）やベック（独）は再帰的近代（reflexive modernization）を提唱した（Beck, Giddens and Lash 1994=1997）。社会の変化が少ない従来の伝統社会では、社会の目標も規範も安定的であったため、私たちは比較的容易に目標を選択したり行動を選択したりすることができた。あるいは、枠組みの中で生きることができた。しかし、変化が激しくしかも科学技術が進んだ社会では、個人は社会に依存せずに自分の行動の結果を踏まえて、自分が何をしたいか考えたり、自分はどのような自分なのかを問うたりするようになった。安定的な伝統社会では、集団への適応は比較的容易であり、さらに集団内の地位が自分らしさを表示してくれたのと対照的である。

再帰的近代化の論者によると、変化の激しい近代では、自分の幸せは自分で決めなければならぬし、変化の状況を常に問い直す必要がある。また、社会の安定性がゆらいだため自分の行為が集団に変化を与えやすくなった結果、行為の根拠や意味を問い直すに際しては、人は自分が与えた影響を含めて状況を観察する必要がある。さらに、ベックによると今日ではかつてのような制御困難な危険が減り、それに代わって制御や選択が可能な危険であるリスクが立ち現れるようになった。そして人々はリスクを選択することがもとめられるようになった。このことも人々に社会や自分自身の問い直しを求めている。

表1の再帰的生産消費に戻ると、人は、世間やメディアに流されて（ルールに乗って）生産や消費をするのではなく、自分で参加して作られた状況をもとに自分自身を問い直して、次の生産消費をする。

（3）自己実現欲求

図8はアメリカの心理学者のマズローの欲求段階説を示したものである（Maslow 1954=1987: 55-90）。マズローの欲求段階説では、人は一つ下の欲求が満たされるとその上の欲求を満たそうとする。言い換えると、下位の欲求が満たされることが次の欲求へ上がる条件となる。また、我々は上位の欲求を満たそうとすると、それよりも下位の欲求にこだわらなくなる。たとえば、自己実現の欲求である創造的活動の欲求に取り組む人間は集団からの尊敬や集団帰属にこだわらなく

なる。なお、年長世代の中には若い世代が自己実現欲求にこだわり苦悩することに対して理解できないまま、それより下位の自我（自尊）の欲求や親和（所属愛）の欲求を満たすための苦悩と比べてしまい、苦悩する若い世代を正當に理解できないことがある。しかし、若い世代は十分に苦しいのである。とりわけ、若い世代の中には下位の欲求が十分に充足されないまま、親や社会や SNS から自分らしくしなさい、自分の可能性を發揮しなさいなどと期待されてマズローの理論に反して不安定な自己実現欲求に苦悩するケースもあり、その苦しさは小さくはない。

さらに今日の学校は生徒の自己実現欲求を育てる言説（「成長欲求」の言説）で満たされている。しかし、生徒集団の状況が不安定であることなどが原因となり、自己実現欲求の前提となる自我（自尊）の欲求や親和（所属愛）の欲求が満たされていないことも少なくない。そうしたマズローの理論に反する状況に対しては、学校は本来段階を踏んで満たされていくはずの複数段階の欲求に同時に対応することが求められる。

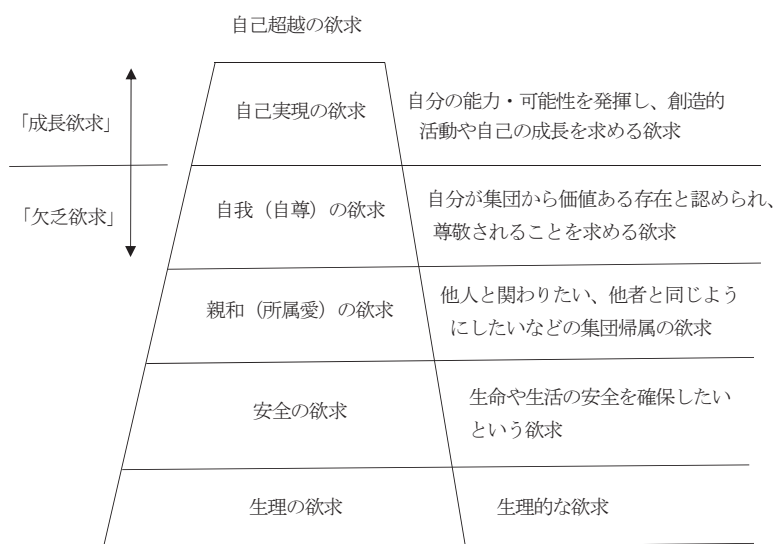


図8. マズローの欲求段階説

引用：A. H. マズロー（1954=1987）より樋田作成

（4）教育の特色化と魅力化

最後に、高校魅力化における教育の特色化と魅力化について検討したい。教育の特色化と魅力化は、高校の外で起きている生産消費や再帰的近代化と入れ子の関係にある。高校魅力化の授業で地域に出た生徒は、もはや与えられたり教えられたりする受動的な存在ではない。生徒は自分から地域の課題を見つけたり働きかけたりする能動的な存在である。生徒は自分で自分の学びを作る存在になる。複数解の中から最適解を選ぶために自分と社会を問い直し続ける。生産と消費になぞらえると、生徒は生産消費を行う者となる。

また、生徒は自分自身や「地域と自分の関係」を問い続ける存在となる。ときには自己実現や自

己表現のためにリスクをとることもする。高校魅力化の授業の中では、授業の生産消費者である生徒はえかき歌型の、すなわち教科書通りで画一的な取り組みはしない／しにくい環境に置かれる。さらには多様に準備されたオプションから取り組みを選択することすらしない／しにくい環境に置かれる。生徒は自分自身や地域と自分の関係を問い直しつづけ、自分で取り組みを作ったりあるいは手間を加えたりするのである。あたかも教師が今日の授業の結果を見て、明日の授業内容を作るのと同じように、生徒も地域に働きかけた結果を見て地域と自分の関係を問い直し、次の働きかけを行う。

このように生徒の地域での学びは生産消費や再帰的近代化と入れ子の関係にある。なお、生徒の具体的な生産消費的取り組みや再帰的近代化的取り組みの実際は第5章で論じる。

第4章 地域と高校の協働関係とその意義

中教審答申や各県の高校再編計画、個々の高校の改革など高校改革の様々な文章・言説に頻繁に魅力化という言葉が現れるようになった。魅力化の潮流が強まっていると見ることができる。いくつかの視点からこの潮流を検討しよう。

（1）地域活性化のエンジンとしての高校

地域を対象とした探究型学習や地域課題解決型学習は地域活性化のエンジンとなる。さらに、高校は地域の様々な利害関係者の様々な利益追求を包含しながら彼（女）らを「協働」させるきっかけとなる。これらの結果、高校は地域から歓迎され、地域に不可欠な存在となってきた。

高校は地域存続の生命線であり、地域活性化の最前線である（樋田 2014）。生命線が意味することは以下である。第1に高校がないことで子どもの高校進学をきっかけに家族を挙げて町を離れる。第2に高校がないことでUターン者やIターン者が移住を思い止どまる。第3に高校生がいなくなることで伝統行事や文化行事ができなくなる。これに対して最前線が意味するところは、第1に地域の特色を活かした教育（地元の特産品や在来種の商品化と販売など）が町の資源を発見したり活用したりするきっかけとなる。第2に高校生を応援することで住民の間で対話が生まれたり住民を奮い立たせたりする。生命線であり最前線である地元の高校が閉校となることは町の存続と活性化の重要なエンジンを失うことなのである（樋田 同上）。

（2）地域社会に関する学科

文科省からの風が吹いている。2021（令和3）年1月26日の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（中教審第228号）は高等学校の「普通教育を主とする学科」の種類を弾力化・大綱化する措置をとることを求め、普通科以外の学科を設置可能とすることが適当であると答申した。

この答申を受けて、2022年4月以降、①学際領域に関する学科、②地域社会に関する学科、③その他特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科が開設可能となった。新学科については、次のように説明されている。

学際領域に関する学科は「現代的な諸課題のうち、SDGsの実現やSociety5.0の到来に伴う諸課題に対応するために、学際的・複合的な学問分野や新たな学問領域に即した最先端の特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科」である

地域社会に関する学科は「現代的な諸課題のうち、高等学校が立地する地元自治体を中心とする地域社会が抱える諸課題に対応し、地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科」である。

その他特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科は「その他普通教育として求められる教育内容であって当該高等学校のスクール・ミッションに基づく特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科」である。 (文部科学省初等中等教育参事官(高校担当)2021:37)

地域社会に関する学科は「現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組む」ということであり、仮に既存の高校魅力化の高校が新しい学科を設置するとしたら、地域社会に関する学科が中心になるものと考えられる。

(3) 昭和の当然視とあきらめからの解放

昭和の授業の風景と今日のそれは様変わりした。とくに、授業は「つまらなくて当然、仕方ない」、「何の役に立つかわからなくて当然、仕方ない」、「生徒の内面まで成長させなくても仕方ない」といった当然視やあきらめは過去の風景となっている。

とりわけ全国募集で魅力化の高校に進学する生徒は、つよい覚悟と期待で、ときめき、ドキドキ、きらめきを求めて高校を選択する。高校魅力化の高校の全国募集(県外募集)の歴史では、当初の入学者はメンタルの側面で自宅近くの高校に入りたくない者の割合が大きかったという。しかし、今日では、高校魅力化の内容に惹かれて自宅から遠く離れた魅力化の高校に入学する者の割合が大きくなったとされている。魅力化の高校の説明会ではときめき、ドキドキ、きらめきが強調されている。

「何の役に立つかわからなくて当然」、「生徒の内面が成長しなくて当然」についても、高校魅力化の高校は学校説明会の段階で生産消費をする生徒や再帰的近代の中で育つ生徒、自己実現欲求の充足を求める生徒に対して、学びがどのような方法で行われどのような意味を持つのか、在校生の声を直に聞かせるなどして伝えている。

これまでは家に近いからとか、偏差値にあった高校だからという理由で高校を選ぶ生徒の割合が

大きかったかもしれないが、魅力化の高校は説明会やホームページ等で進路実績や進路指導体制だけでなく、授業がどのように面白いのか、何の役に立つのか、生徒がどのように成長するかを在校生が目を見せさせている写真のあるパンフレットを使って説明している。

（4）今の充足と将来の充足の二兎を追う：“高校魅力化のコンサツルメンタル”

従来の研究者視点では、将来のSES（社会的地位と経済的地位）の達成のためにいまを犠牲にする生徒と、いまの充足のために将来のSESを犠牲にする生徒の2つの生徒カテゴリーを想定していた。インスツルメンタル（instrumental= 道具的）とコンサマトリー（consummatory= 成就的）という用語がある。アメリカの社会学者パーソンズの用語である（Parsons 1968=1973）。上述の生徒像のうち前者がインスツルメンタルな外発的欲求充足であり、後者がコンサマトリーな内発的欲求充足である。前者は勉学に集中して学歴主義的な成功を収めることであり、後者は趣味や部活、交友関係など、高校生活においていまここのときめき、ドキドキ、きらめきを求めることである。

ただし、この二者択一的なカテゴリーは、ひと時代前の進学指導が過熱化していたときの高校研究者の分析枠組みであり、今日ではこのような分析枠組みはリアリティを失っている。かつての進学指導が加熱した高校では社会的地位や経済的地位の達成のために脇目を振らずに受験勉強に没頭する生徒文化（インスツルメンタルな生徒文化）と高校時代をそれ自体が価値のあるものとして楽しむ生徒文化（コンサマトリーな生徒文化）という対立軸で生徒文化を分けて捉えた。そして輪切り選抜の上位に位置する高校の生徒文化がインスツルメンタル的で、中位や下位に位置する高校の生徒文化はコンサマトリー的であると捉えた。

これに対して、今日では、将来のための準備として行う高校魅力化の学習方法が地域に出て社会貢献や社会的実践をすることへと変化した。その結果、生徒が高校時代に地域貢献や地域での実践に友人や地域住民と一緒に熱く取り組む場面が増えた。魅力化の高校では将来の地域貢献や地域での自己実現・自己表現という新しいインスツルメンタルな目標が生まれた、その目標はいまの学校生活それ自体を価値あるものとして楽しむコンサマトリーな目標とは対立はしない。むしろ調和する。魅力化の高校の新しいインスツルメンタルとコンサマトリーは両立し調和することが可能なのである。

筆者はこのような意味での高校魅力化の新しいインスツルメンタルとコンサマトリーとの2つの目標の調和を、仮に“高校魅力化のコンサツルメンタルな目標”と呼ぶ。そしてそれはまさに高校魅力化の高校が意識して目指す目標である。それまでの学校教育が欲求充足の目標（中心）がインスツルメンタルの1つしかない円形に例えられるのに対して、今日のコンサツルメンタルな学校は目標（焦点）が2つある楕円形に例えられる。今日の学校教育は中心が1つの円形の学校教育から2焦点（多焦点）の楕円形の学校教育へと変化している。

なお、新しいインスツルメンタルはパーソンズが言う『『私的な』欲求や興味を『超えた、そしてその上位に立つ』価値や目標に向かって献身する』という意味でのインスツルメンタルに該当す

るようになったことが、こうした動向の背景にあると考えられる。

社会は「それ自体が目標」であるのではなく、むしろある意味で社会の外部の、あるいは社会を超越する諸目標を達成するための手段として把握されている。文化的遺産に照らしているならば、これらの目標は宗教的な用語によって規定されてきたものである。そのもっとも重要な観念は、人間は「自分の属する社会組織をも含めて」神の意志の実現のための道具として存在するというものである。世俗的には、それは一般に、いわゆる世俗的「個人主義」といった形をとって表われている。社会とは、諸個人がよき生活を達成するのを、「促進する」ために存在すると考えられているのである。ここで本質的に重要な問題は、個人にとってのよき生活の内容はどのようなものかという点である。それはある意味で「自己－満足」的なものなのか、それとも逆に純粋に「私的な」欲求や興味を「超えた、そしてその上位に立つ」価値や目標に向かって献身することなのであろうか。

(Parsons 1968=1973:262)

(5) 地域社会の高変革型第2次集団化

集団の研究では家族や親族は第1次集団 primary group と呼ばれる。これに対して会社や学校は第2次集団 secondary group と呼ばれる。家族や親族は全人格的關係が重視される。これに対して第2次集団は機能や部分人格的關係が重視される。地域は第1次集団的でもあるし第2次集団的でもある。しかし、本稿は活性化の側面を強調して地域を第2次集団の側面から捉えたい。

地方郡部の地域は長い間、低変革型の第2次集団であった。そのため過疎化を従容として受け入れて村鎮めを行う地域もあった。

しかし、近年は分権化、自立分散型化、SDGs 化に呼応して、地方郡部の地域は強く変化を志向する高変革型化し始めている。高変革型第2次集団となった地域は地域活性化のエンジンである高校魅力化を得たことで変革を加速させている。

以上、5つの視点から高校魅力化の潮流を考察した。これらに通底することは教育の地域主義的転回が始まっていることである。戦後の近代化・貿易立国の時代に産業、社会、文化の基盤と目的が国家に置かれていたことを産業主義という。これに対して、1970年代後半以降はそれらの基盤と目標が地域に置かれる地域主義の時代へと転回した。地域主義の当初は公害が社会問題となっており、環境との向かい合い方が地域主義台頭の原動力となっていた。教育の分野では他の分野に遅れて、近年の高校魅力化の動向の中でようやく教育の地域主義的転回が本格化した。教育の分野での地域主義の背景には、日本の社会、産業、文化が自立分散型となってきた、地域も高校も、もはや国や都道府県によって支えられたり方向付けられたりできなくなったことが挙げられる（樋田大二郎 2020）。本稿ではこのあと、教育の地域主義的転回の意義といくつかの側面について検討する。

なお、本稿はすべての高校やすべての生徒が地域主義的な学びと進路形成をすることは想定して

いない。最先端の科学技術を学び、グローバルな進路形成をする高校や生徒がいて当然である。ただし、これからの高校では関係人口も含めて地域主義的な要素のある進路形成が求められるのではないかと考えている。

第5章 高校魅力化の学習

（1）自己実現欲求段階の学習の動機付け

レッド・オーシャンでの受験競争の学習とブルー・オーシャンでの高校魅力化の学習は、動機付けの重心や学習の要素が異なる。

学習動機付けの主要なメカニズムは外的報酬の操作、内的報酬の操作、内発的動機付けなどである。本稿では、この3つにコンサルメンタルな自己実現欲求の動機付けを加えて考察する。

学習の動機付けの重心は高校魅力化の高校では表2のように外的報酬の操作（アメとムチなど）や内的報酬の操作（尊敬や賞賛など）から、内発的動機付け（不思議感、ドキドキ、きらめき・・・）や自己実現欲求へと移行している。

マズローの自己実現欲求段階の人間にとって、「動機づけとはまさに人格の成長であり、性格の表現であり、成熟であり、発展である。すなわち、一言で言えば自己実現なのである」（Maslow 1954=1987：238）。

表2. 学習の動機付けの重心の変化

受験勉強型動機付け	高校魅力化型動機付け
外的報酬の操作（受験の可否というアメとムチ） 内的報酬の操作（アカデミックスターという尊敬や賞賛）	内発的動機付け（不思議感、ドキドキ、きらめき） 自己実現欲求（成長欲求）

出典：樋田作成

（2）高校魅力化の学習の3要素

図9はこれまでの議論を反映して“コンサルメンタル”な学習の3要素を図示したものである。

- a. 興味・関心・郷土愛の学習の要素は、作野のいう「やりたいこと」が豊かになることである。内発的で自発的な主体性（手“が”出る状態）が育つ、今この授業の中で満足したいという意味ではコンサマトリーな関心である。
- b. 実行力の学習の要素は、作野のいう「やれること」が豊かになることである。知識・技能、段取り力、表現力、資源の利活用、手段の獲得などが学習の内容である。通常の学力に近いが、意味ある失敗が成功までの過程として重視される。手段的側面の強い要素であるが、「a. 興味・関心・郷土愛の学習」や「c. 問題意識の学習」と重なり合ったときは、学歴獲得のための詰め込み教育などと異なり、“コンサルメンタル”な学習の重要な要素となる。

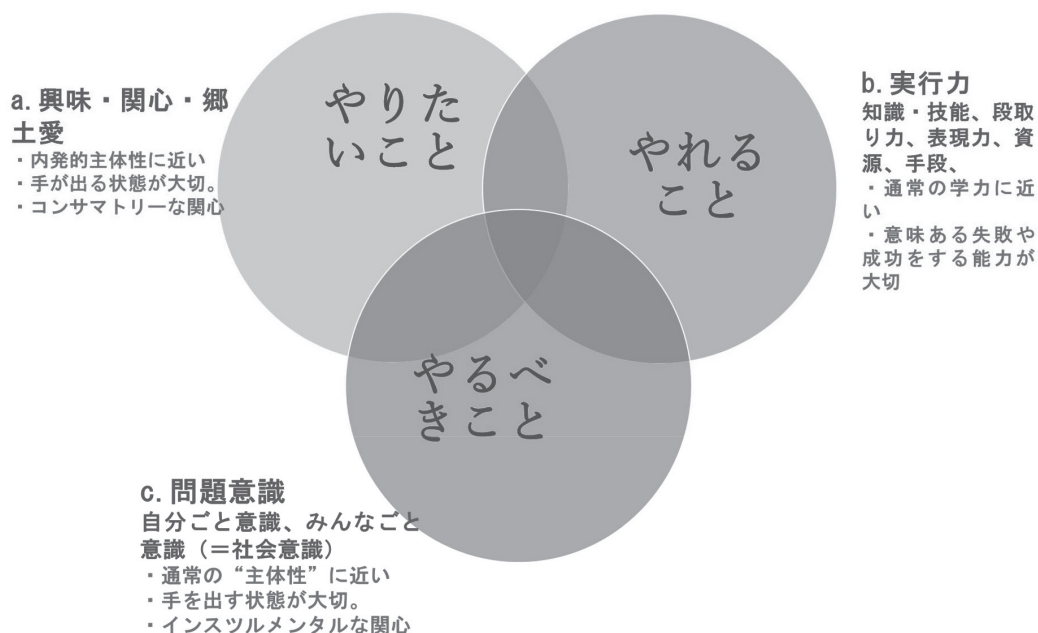


図9. コンサツルメンタルな学習の3つの要素

出典：樋田・樋田（2021a：117）の図のタイトルを修正。もとの図は作野（2020）をもとに樋田が作成したもの。

c. 問題意識の学習の要素は、作野のいう「やるべきこと」が育ち明確になることである。

自分ごと意識、みんなごと意識（＝社会意識）が涵養され、社会貢献や自己の成長を要素とするインスツルメンタルな意識が育てられる。「手“を”出す」状態の主体性が育成される（樋田・樋田 2021a）。

（3）地域学校協働型魅力化高校

本稿が対象とする地域学校協働型魅力化高校は、前述の2022年4月から開設される「地域社会に関する学科」で想定される幅広い範囲の高校の中の、地域学校協働を行っている高校が該当する。そして、本稿の地域学校協働の定義は、地域と学校が協働して相互作用しながら魅力化したり成長したりすることである。地域学校協働を行う高校は、地域について教科書で学ぶ高校ではないし、地域の人に来校してもらい話を聞くことも含めて生徒が校内にとどまって学習をする高校ではない。さらに地域の人に援助者としての協力を求める高校ではない。本稿が対象とするのは生徒が地域に出て、地域住民と共に地域活性化の実践に取り組み、生徒と地域が相互の良さを生かして互恵的に活性化していく高校である。生徒は将来の地域人材となる可能性を視野に入れながら地域住民と共に地域資源を活用したり、地域課題を解決したりという実践的な学びを行っている。

今後多くの学科や高校の取り組みが魅力化を自称する可能性がある。魅力化の概念を幅広く捉えることで様々な高校教育改革が促進される可能性が期待されるが、同時に、概念が曖昧になり地域

学校協働の中で生徒と地域を互恵的に育てる営みがおろそかになる可能性が懸念される。部活指導の強化やスポーツアクティビティの導入、寄宿寮や公設塾の低価格化などを目玉にして魅力化を自称するケースがすでに現れ始めている。

地域学校協働を行う高校とそれ以外の高校を識別することを目的に、本稿はこれ以降、生徒が地域に出て、地域住民と共に地域の産業、社会、文化の実践に取り組み、生徒と地域が相互の良さを生かして互恵的に活性化していく高校を「地域学校協働型魅力化高校」または略して「地域協働型魅力化校」と呼ぶことにする。

（４）地域学校協働魅力化校の取り組みの３つの側面

表３は地域協働型魅力化校の取り組みの側面を読み取ることを目的に、文科省の令和元年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」指定校のうち地域魅力型20校の取り組みのタイトルを示したものである（文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）2019）。

20校のタイトルは応募条件に対応した取り組み内容を表しているが、大きくは①地域活性化、②地域人材育成、③（地域協働型魅力化の）教育開発の３つの側面が含まれていた。

①地域活性化の表現を含む取り組みは「『おがわ学の構築・実践』学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト」、「未病・防災～高齢者比率約４割の町で高校生が挑む少子高齢化」、「大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）」などである。

表３．地域魅力化型の取組タイトル

①地域活性化の表現を含む取り組み	「『おがわ学の構築・実践』学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト」 「未病・防災～高齢者比率約４割の町で高校生が挑む少子高齢化」 「大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）」
②地域人材育成の表現を含む取り組み	「震災を乗り越え持続可能な未来を創造する人材育成プログラム」 「白い森人 創生プロジェクト」 「鯖江型高校教育『オール SABAE』の構築のもと、持続可能な地域社会を形成する市民の育成」 「外部資源を有効に活用した、地域を担う『人財』の育成 ～地域に育ち、地域に育ててもらふキャリア教育～」 「チームいいなん」の挑戦 ～未来を切り拓く“地域に根ざした人材”育成～」 「中核市発 持続可能な社会を創造する「地域共創人」の育成」 「『恕』の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成」 「みさこう・せんたんプロジェクト～佐田岬半島・地域デザイン人材の育成～」 「『ひと・もの・資源の宝庫』上天草で未来を切り拓くリーダーの育成」などである。
③地域協働型教育システム開発の表現を含む取り組み	「新庄・最上 LINK プロジェクト」 「『世界水準の山岳リゾート HAKUBA』の学びの循環サイクルの構築」 「『地域創造コース』による地域の活性化に挑む学校」 「未来型解決能力を持つ地域の担い手を育成する IKUNO モデルの開発」 「地域で学び地域と育つ神山校～中山間地の地域内循環モデルの構築～」 「地域価値を創造するグローバル・ヒーロー育成に向けたカリキュラム開発および実践」 「産学官連携による人の地域循環教育プログラムの研究開発」 「地域人材育成循環システム『平田プラタナスプラン』の構築」

出典：文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）（2019）より樋田作成

②地域人材育成の表現を含む取り組みは「震災を乗り越え持続可能な未来を創造する人材育成プログラム」、「白い森 創生プロジェクト」、「鯖江型高校教育『オール SABAE』の構築のもと、持続可能な地域社会を形成する市民の育成」、「外部資源を有効に活用した、地域を担う『人財』の育成 ～地域に育ち、地域に育ててもらふキャリア教育～」、『『チームいいなん』の挑戦 ～未来を切り拓く“地域に根ざした人材”育成～』、「中核市発 持続可能な社会を創造する「地域共創人」の育成」、「『怨』の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成」、「みさこう・せんたんプロジェクト～佐田岬半島・地域デザイン人材の育成～」、「『ひと・もの・資源の宝庫』上天草で未来を切り拓くリーダーの育成」などである。

③地域協働型魅力化の教育開発の表現を含む取り組みは「新庄・最上 LINK プロジェクト」、「『世界水準の山岳リゾート HAKUBA』の学びの循環サイクルの構築」、「『地域創造コース』による地域の活性化に挑む学校」、「未来型解決能力を持つ地域の担い手を育成する IKUNO モデルの開発」、「地域で学び地域と育つ神山校～中山間地の地域内循環モデルの構築～」、「地域価値を創造するグローバル・ヒーロー育成に向けたカリキュラム開発および実践」、「産学官連携による人の地域循環教育プログラムの研究開発」、「地域人材育成循環システム『平田プラタナスプラン』の構築」などである。

以上、地域協働型魅力化校の取り組みの3側面は①地域活性化、②教育実践を通しての地域人材育成、③（地域協働型魅力化の）教育の創造であった。

なお、本稿は採択された高校のタイトルから地域協働型魅力化校の3側面を浮かび上がらせたが、もともと文科省の当該事業の応募条件に地域活性化、地域人材育成、地域協働型教育システム開発他の条件を満たすことが含まれていた。そして採択された高校の実際の取り組み内容を見るとこの3側面の十全な実施が含まれていた。

（5）地域協働型魅力化校のプロジェクト

表4は筆者が注目している、あるいは実際に訪問したり協働でプログラム開発したりしている5つの高校—鳥根県立吉賀高校、愛媛県立三崎高校、愛媛県立今治北高校大三島分校、山形県立小国高校等、宮崎県立飯野高校—で生徒が取り組んでいるプロジェクトの事例を筆者自身が整理したものである。調査・探究型、開発・販売型、観光型、地域貢献・提案型のプロジェクトが行われていた。

調査・探究型はアメンボウの目になって川を探究、地域社会の変容と有害鳥獣の関係の調査等のプロジェクトが行われており、この型のプロジェクトは学際融合的な学びに近いものとなっていた。

開発・販売型は、地域の特産品を使った食品や商品の開発と販売である。開発・販売型のプロジェクトの成果は高校生ビジネスプラン・グランプリ（日本政策金融公庫）や、全国高校生 SBP プロジェクト（一般社団法人未来の大人応援プロジェクト）やカタリバなどで発表されることがある。食品開発は比較的容易なプロジェクトであり取り組みの事例は多い。しかし、単に地元食材を使っ

表4. 地域協働型魅力化校のプロジェクト事例

調査・探究型	アメンボウの目になって川を探究*、地域社会の変容と有害鳥獣の関係の調査
開発・販売型	地域の特産品を使った食品や商品の開発と販売**
観光型	イベントの実施、町の祭りやイベントの活性化、地域の魅力の発信・ちらしやパンフレット作成、観光列車、サミットの企画運営（小規模校サミット、せんたんミーティング）
地域貢献・提案型	岸壁の壁画、施設訪問、地域の避難訓練実施（老人や幼児を含む）、幼児の遊び場づくり、母親の居場所作り、環境保護石けんの普及、地域の安全・安心他

出典：樋田作成

た食品を開発する以上の取り組みを行った高校生の事例がある。鳥根県立吉賀高等学校の生徒は吉賀町内でパン作りをしている障害者福祉施設「よしかの里」とコッペパンを協働で開発した。「障害者への工賃が低い」「地域の障害者への理解が乏しい」などの課題を共有し、「吉賀町らしいものを開発する」、「ひととひとをつなぐ」、「吉賀町を障害者が活躍できる町にする」を開発のコンセプトとした。そして無農薬・有機栽培で有名な町内の柿木地区で栽培されたイチゴやブルーベリー、ユズなどのジャムを挟んでコッペパンを作り上げた。

観光型はイベントの実施（祭りやイベントの活性化）、地域の魅力の発信（ちらしやパンフレット作成）、観光列車、サミットの企画運営（小規模校サミット、せんたんミーティング）などが行われていた。観光型のプロジェクトを発表する機会は、隠岐島前高校を有名にした観光甲子園（NEXT TOURISM）などがある。

地域貢献・提案型は岸壁の壁画、施設訪問、施設訪問、地域の避難訓練実施（老人や幼児を含む）、幼児の遊び場づくり、母親の居場所作り、環境保護石けんの普及、地域の安全・安心などが行われていた。前述の全国高校生 SBP プロジェクトやカタリバが発表の機会となる。

（6）地域学校協働とコンソーシアムの構築

地域学校協働型魅力化を促進するコンソーシアム（事業共同体）にはいくつかの構成メンバーのタイプが考えられる。複数高校間のコンソーシアム、地域側のプレイヤーのコンソーシアム、高校と行政のコンソーシアムなどである。しかし、地域学校協働型魅力化高校にとっては、地域と行政と高校を参加者とする協働のためのコンソーシアムを作ることが有効である。文科省は「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の応募条件の1つに次に見るような地域コンソーシアムの構築を課している。

新高等学校学習指導要領を踏まえ、地域を分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するため、「経済財政運営と改革の基本方針2019」や「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」に基づき、高等学校が自治体、高等教育機関、産業界等との協働によりコンソーシアムを構築

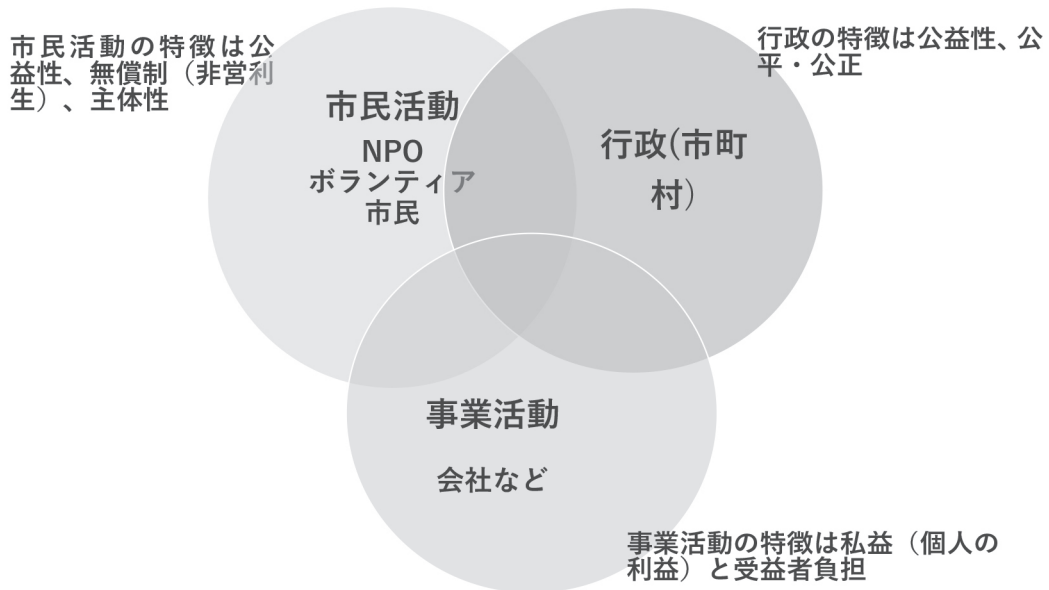


図10. 地域協働の概念図：不得意な部分を協働で克服する

出典：樋田・樋田（2021a: 216）より引用。大藤（2017）をもとに樋田が作成したもの。

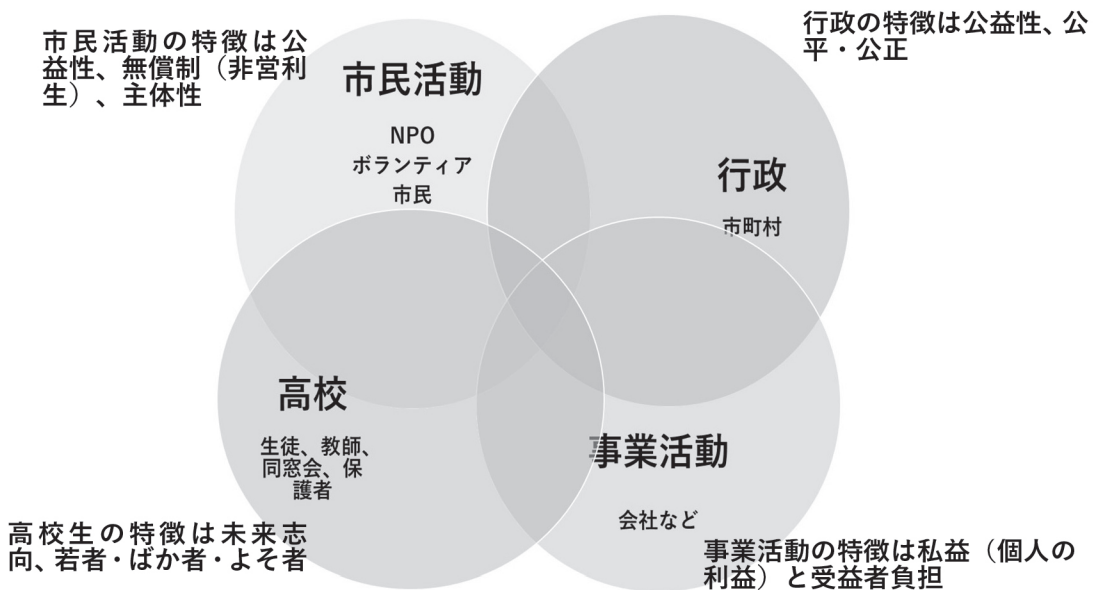


図11. 地域学校協働の概念図：高校を含む協働の概念図

出典：樋田・樋田（2021a: 217）より引用。大藤（2017）をもとに樋田が作成したもの。

し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進することで、地域振興の核として
の高等学校の機能強化を図る。

（文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）2020：7）

文科省が課した地域コンソーシアムは「経済財政運営と改革の基本方針2019」（内閣府）や「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」に基づいているものであったが、そこでは高校は「地域振興の核」に位置づけられていた。

（7）地域学校協働の構造と意義

企業と地域と行政と高校の4者を取り入れた地域学校協働は地域の生態系の有効な活用が期待できる。ここで地域学校共同ではなくて地域学校協働なのは、「共同」は全員が同じ個性、同じ資格で参加することを意味する。共同浴場や共同墓地などが共同の例である。これに対して「協働」は異なる個性、異なる利害関係のプレイヤーがそのまま参加することを意味する。

協働の現場には次のような言説がある。「急ぐときは独りで、遠いときは一緒に（Fast alone, Far together.）」という言説である。共同では参加者が同じ資格で同じ個性となるのであたかも独りであるのと同じ効果が想定される。だから急ぐときには向いている。公正性が保障されることも期待できる。しかし、参加プレイヤーの多様性や・多様な利害が十分に満たされないので、遠くへ行くときには適さない。また、中心となるプレイヤーが退出したときに活動の継続性が保たれにくい。われわれは、中心となる教員の異動で素晴らしい教育実践が終息・消滅してしまう事例を多数見てきた。このあと、樋田・樋田（2021a）をもとに地域の協働について考えてみよう。

まず、高校を含まない場合の地域の連携を考えてみよう。高校を含まなくても図10に示すように行政と事業活動と市民活動が協働することで地域活性化に対しては大きな効果を期待できる。

市民活動の特徴は公益性、無償制（非営利性）、主体性であり、行政の特徴は公益性と公平・公正であり、事業活動の特徴は私益（個人の利益）と受益者負担である。行政と市民活動と事業活動の三者はそれぞれの特徴を殺すのではなく、それぞれの特徴を生かして、協力し合うとされる。

「ICTを活かす新しい働き方、新しい産業」部会で首長やNPO、起業家が行政、NPO、事業活動について次のことを語っている。・・・「NPOは期待されていないので形を問われない。柔軟に考えられる」「政治は仕事で結果を求められる」「行政に任せると、住民はもたれ合う、足を引っ張り合う」「行政ではなくて、外部の人が僕らが考えていなかったことを始めてくれる」などである。（シンポジウム G1 中国・四国 2015（2015年12月15日開催））

地域の協働に関わっては近年、行政、事業活動、住民の3者のプレイヤーの役割関係、および行政から見た住民や事業活動が盛んになり意義が明らかにされている。また、行政の視点からは、行政に依存するのではなく、協働によってそれぞれの立ち位置を活かすことを求めていることが分かる。コミュニティは一様なプレイヤーの集まりではなく、複雑でレジリエンスに富む集合体であり、地域生態系に例えられる（大藤 2017）。地域協働に高校が参加すると、地域生態系のレジリエンスが高まったり産出物が豊かになったりする。

つづいて、図11で高校が地域共同に参加した時に、地域生態系にどのような変化が起きるか考えてみたい。

高校が参加して地域協働が地域学校協働へと変化した時は、地域生態系の協働が成長しやすくなる。高校支援という目標の下で、地域生態系は連携が強化され、長所を生かしあい短所を補い合う協働が高まる。その際に着目したいのは、地域学校協働に参加する高校生は前述の地域人材育成と言う若者（未来志向性と強いエネルギー）、ばか者（挑戦性と、失敗から学ぶことが許される立場）、よそ者（教科書や他地域の知識や技能・人材との繋がり）という特徴を持つことである。これらは地域内の関係者が地域活性化のために必要とする要素である。

（樋田・樋田 2021a：127）

高校生は、地域内の他のステイクホルダーとは異質な原理を持ち込むことができるのであり、そのことが地域協働の効果を飛躍的に高める。そして、高校は飛躍的に高まった地域協働のエネルギーを教育資源として活用することができる。高校が地域生態系の中に位置づけられることで地域に対して養分を十分に供給できる。同時に、地域から多くの養分を吸収できる。学校を核にして地域が協働するようになることで、地域のプレイヤーがコミュニケーションを持つようになる。そして良さや特徴を活かし合うことができる。高校生は成長途上であると認識されているので、行政も、住民も営利団体も生徒を支援しようとする。

筆者が関わっている高校魅力化では筆者たち大学教員への対応がきっかけとなり関係者が始めて「1つのテーブル」に着いたということがあった。

コンソーシアムは事業体と翻訳される場合もある。コンソーシアムの用語については、青森県の高校再編計画の事例のように複数の高校が事業に取り組むことをコンソーシアムと呼ぶことがある。本稿は、図11で見たように、地域協働型魅力化のために高校を含めたステイクホルダーがプレイヤーとして集う場をコンソーシアムと呼んでいる。

第6章 終わりに：テイクコントロール、ブルーオーシャン、地域学校協働型高校魅力化

本稿は地域学校協働型魅力化高校の魅力化事業とテイク（バック）コントロールをめぐって、冒頭に挙げた13の側面と16の要素を検討した。このあと、本稿の考察を整理したい。

高校はこれまで、進路実績や部活の成績を指標に存続の競争をしてきた。そして都道府県教委に対して存続の政治的働きかけを行ってきた。レッド・オーシャン戦略である。犠牲を伴う激しい戦いに負けた高校は入学者が減少し、最悪の場合は閉校となる。しかし、都道府県教委は地元地域の高校存続希望が強いこと、また、閉校が地域社会に与える影響が大きいことを理解していたので、閉校には踏み切らずクラス数の削減や定員割れの猶予を行った。こうしたぎりぎりの状況の中で、

一部の高校が存続事業ではなく魅力化事業というブルー・オーシャン戦略を開始した。

地域学校協働型魅力化高校のブルー・オーシャン戦略には以下の特徴があった。

第1に再帰的近代化に応えることが始まっている。すなわち、中央志向や大企業志向や学歴主義、産業主義に基づいた進路指導の問い直しが始まっている。本稿で参照したコヴィーは「7つの習慣」の1つとして、臨終の時にたったつもりで人生を考えることや、道徳や倫理を重視する「人格主義」に立つことを勧めている。日本の伝統社会や従来型の産業社会が揺らいでしまった今、高校は産業主義や学歴主義のみに応えるのではなく、地域と向かい合いながら自らのありかたを問い直すことが始まっている。再帰的近代化に対応した問い直しである。

第2に学校規模や有名大学進学者数実績などの「量による解決」から次の第3～第5にあげる「質による解決」への転回が起きている。今日の高校では「量による解決」はレッド・オーシャン戦略であり、「質による解決」はブルー・オーシャン戦略である。

第3は生産消費の時代に生きる能動的で創造的な能力の育成が始まっている。消費者が生産消費（価値共創）を行う現在では、それらを支えられる人材の育成が求められる。また、高校魅力化の授業は生徒が創ったり一手間加える学びの場（＝生産消費）になろうとしている。

第4は生徒の「自己実現欲求」や「自己超越欲求」が市民権を得ようとしている。それらは生徒の学習の動機付けにもなっている。また、今日の2焦点の楕円形型高校教育では、社会貢献（パースンズのインスツルメンタル）と内発的欲求の充足の2つが同時に表出している。

第5は産業と社会の地域主義的転回に高校教育が追いつき始めている。地域社会の要請（や社会変動）に応じるという意味だけでなく、ブルー・オーシャン戦略は地方創生、地方分散などと調和的であり、地域学校協働が展開されている。

近年、文科省の言説やメディアの言説があまりに急速に広がった結果、高校生のコンサルメンタルな学びが実現されなくなる懸念が生じている。また、えかき歌型で画一的な高校魅力化の出現によってレッド・オーシャンに帰結しかねない懸念が生じている。高校の数だけ、地域の数だけブルー・オーシャンが存在している。ブルー・オーシャン戦略を実施するときには個々の高校の主導権を生かすことが求められる。

謝辞

本稿は京都府私立中高等学校経営者協会での講演（2021年11月24日）をもとに大幅に加筆修正したものである。素晴らしい機会をいただいたことに感謝したい。筆者は島根県立吉賀高等学校、横田高等学校、隠岐島前高等学校、愛媛県立三崎高等学校、今治北高等学校大三島分校、北海道奥尻高校他の高校魅力化に取り組む高等学校のみなさん、地域・教育魅力化プラットフォームのみなさん、その他紙幅がないのでみなさんのお名前を書くことはできませんが、調査研究にご協力いただいたみなさんやアドバイスをいただいたみなさんに感謝したい。また、地域人材育成研究会のメン

バー・関係者である、寺崎里水氏、杉本卓氏、大木由以氏、樋田有一郎氏、岩木秀夫氏、石戸屋繁氏、沖塩有希子氏、光永亜希子氏、藤村朝子氏に感謝したい。本研究はJSPS 科研費 JP21K02271 の助成を受けた。

本稿は、研究結果の紹介ではなく、高校魅力化に取り組んでいる高校やこれから取り組もうとしている高校の関係者、および高校魅力化研究の仲間に対して、私たちの研究会の現時点での蓄積を整理し、伝えさせていただきご意見をいただくことを使命としています。みなさんからのフィードバックをよろしくお願いいたします。

引用・参考文献

- A・H. マズロー, 1954=1987, 『人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ』(小口忠彦訳) 産業能率大学出版部.
- A. トフラー, 1980=1980, 『第三の波』(徳山二郎監修・鈴木健次訳・桜井元雄訳) 日本放送協会出版会.
- ベック・ギデンズ・ラッシュ, 1994=1997 『再帰的近代化』(松尾精分他訳) 而立書房.
- ベネッセ教育総合研究所, 2016 『第5回学習基本調査データブック [2015]』.
- 中央教育審議会, 2021, 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適化学びと、協働的な学びの実現～(答申)(中教審第228号)」.
- 中央教育審議会(初等中等教育分科会教育課程企画特別部会), 2015, 「資料1 教育課程特別部会 論点整理」.
- 「2. 新しい学習指導要領等を目指す姿」. 地域・教育魅力化プラットフォーム, 2021, 『2021地域みらい 留学 高校進学 3 years』.
- 樋田大二郎, 2020, 「町立移管が示した高校教育の地域主義的転回——奥尻高校の実践から見える高校魅力化の意義」『地域人材育成研究』地域人材育成研究会, (3): 102-108.
- 樋田大二郎, 2021, 「主体的・対話的で深い学びの主体性——高校魅力化で育つ内発的主体性を世代論と演劇教育の観点から考える」『青山学院大学教育人間科学部紀要』(12): 19-35.
- 樋田大二郎・樋田有一郎, 2015, 「社会関係資本と地域資源の利活用による地域人材育成——島根県離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業の取り組み」『青山学院大学教育人間科学部紀要』(6): 1-20.
- 樋田大二郎・樋田有一郎, 2018, 『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト——地域人材育成の教育社会学』明石書店.
- 樋田大二郎・樋田有一郎, 2021a, 「地域学校協働にとりくむ高校魅力化改革」『教育研究』青山学院大学教育学会紀要, (65): 115-132.
- 樋田大二郎・樋田有一郎, 2021b, 『地域人材育成研究』地域人材育成研究会, (4).
- 樋田有一郎, 2014, 「町存続の生命線としての高校存続. 町活性化の最前線としての高校活性化——島根県立横田高校の挑戦」『青少年問題』61 (655): 42-47.
- 樋田有一郎, 2016, 「新たな協働・公共性の主体的教育——離島・中山間地域の高校生のソーシャル・キャピタル形成についての考察」『日本学習社会学会年報』12: 44-54.
- 樋田有一郎, 2020a, 「高校魅力化の目的と生徒にとっての意義——三崎高校生徒の学びについての語りから」『地域人材育成研究』地域人材育成研究会, (1): 30-33.
- 樋田有一郎, 2020b, 「高校魅力化における『地域の特色を生かした教育』のあり方を考える——学習目標と学習効果の整合性に着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』27 (2): 51-63.
- 樋田有一郎, 2020c, 「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性——島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して」『村落社会研究ジャーナル』26 (2): 1-12.
- 樋田有一郎, 2021a, 「人口減少県の高校魅力化から全国の普通科の特色化・魅力化へ——どのように離島の高校改革が全国の高校改革に展開したか」『山陰研究』山陰研究センター紀要, (14).
- 樋田有一郎, 2021b, 「第19代校長齋藤雅典先生(2013年度～2015年度)の語り——最初は、やること自体が

- 目的」、『地域人材育成研究』地域人材育成研究会，（5）：6-26.
- 樋田有一郎，2021c，「設置者移管と地域住民による内発的高校改革——奥尻高校の町立移管から高校魅力化の地域主義的転回を考える」『地域人材育成研究』地域人材育成研究会（4）：6-15.
- 広井良典，2001，『定常型社会——新しい「豊かさ」の構想』岩波書店.
- 本多正人・屋敷和佳・小入羽秀敬，2019，「高等学校の再編整備と地方創生」渡邊恵子編『地方教育行政の多様性・専門性に関する研究報告書5 地方創生と教育行政 平成30年度プロジェクト研究報告書 教育制度-046』国立教育政策研究所，79-134.
- 市川浩，1993，『＜身＞の構造——身体論を超えて』講談社.
- 今後の県立高校の在り方検討委員会，2020，『2020年代の県立高校の将来像について（提言）』.
- 公学生服株式会社，「カンコー博物館」（2021年11月15日取得，<https://kanko-gakuseifuku.co.jp/museum/>）.
- 文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当），2018，『地域との協働による高等学校教育改革推進事業の趣旨等について』（令和2年7月30日）（2021年10月30日取得，https://www.mext.go.jp/content/20200803-mxt_koukou02-000009164_10.pdf）.
- 文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）「令和元年度『地域との協働による高等学校教育改革推進事業』指定校の取組について」（2021年10月30日取得，https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kai-kaku/1420963.htm）.
- 文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当），2021，「新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正について」（令和3年4月21日）（2021年10月30日取得，https://www.mext.go.jp/content/20210420-mxt_koukou01-000013554_02.pdf）.
- 文部科学省中央教育審議会・初等中等教育分科会，2015，「2. 新しい学習指導要領等が目指す姿」（2021年10月10日取得，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm）.
- 隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会，2014，『（平成26年～平成30年）隠岐島前高等学校新魅力化構想』.
- 大藤文夫，2017，「協働のまちづくり施策——呉市の協働15年の軌跡」『社会情報学研究：広島文化学園大学社会情報学部紀要』22：23-35.
- 作野広和，2020，「大学教員による高校魅力化への関わり」発表資料，地域魅力化プラットフォーム主催シンポジウム「地域みらい留学への新しい関わり方 vol.2」，2020年9月12日，オンライン開催.
- 佐野勝彦，2017，『女子高生制服路上観察』光文社.
- 島根県教育委員会，2006，「第1回魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会（2006（平成18）年3月20日）会議録（事務局説明）」.
- シンポジウム G1 中国・四国2015（2015年12月15日開催）.
- スティーブン・R・コヴィー，1989=2015，『7つの習慣 人格主義の回復』（フランクリン・コヴィー・ジャパン訳）キングベアー出版.
- Talcot Parsons，1968=1973，『社会構造とパーソナリティ』，（武田良三訳）新泉社.
- 東芝科学館（2021年11月19日取得，https://toshiba-mirai-kagakukan.jp/learn/history/ichigoki/1955cooker/index_j.htm）.
- 読売新聞，2018，「公立校4割 定員割れ 都道府県立18年春入試、少子化で」全国版2018年11月4日朝刊，1面.
- 吉賀高校，2010，『中学生の進路選択と中高一貫教育の課題』『中高一貫教育基本構想』（H22年4月）.